

(別紙 2)

論文審査の結果の要旨

氏名 金 天鶴

さまざまな仏教思想の中でも華嚴思想は東アジア全域にわたって広範に展開し、大きな影響を与えた。しかし、中国・朝鮮の華嚴思想の研究が進んでいるのに対して、日本に関しては、鎌倉時代の明恵・凝然などについてある程度研究があるものの、それ以前の古代における展開に関しては、その全体像を解明するような研究は皆無といってよい。特に平安時代に関しては、「私記」と呼ばれる手控え的な写本が多く残されているが、それらは一部を除いて翻刻もされておらず、まったく手が付けられていない状態である。そのような状況の中で、本論文は、未翻刻の写本をも渉猟して平安時代における華嚴思想展開に関する資料を提示するとともに、それらの思想を分析解明し、中国・朝鮮の華嚴思想と比較しつつ、日本の華嚴思想の独自性を明らかにしている。

本論文は五章からなる。Ⅰ「序論」の後、Ⅱ「奈良時代の華嚴思想」では、平安時代の華嚴思想の前提となる奈良時代について、審祥・智憬・寿霊を取り上げ、新羅の影響下に出発した東大寺華嚴が次第に中国の法蔵中心に移っていくこと、『大乘起信論』『法華経』を重視する日本の特徴が現れていることを明らかにしている。Ⅲ「平安時代の華嚴思想——私記類を中心として」は、本書の中心をなす章で、増春『華嚴一乗義私記』をはじめとする多数の「私記」類を紹介し、詳細に検討を加えている。その結果、平安時代の華嚴思想には、東大寺派、薬師寺派、さらに真言宗を兼学する海印寺派の三つの流れがあったと推定している。それらは相互に論争をしながらも、奈良時代の傾向を受け継ぎ、法蔵の教学を中心として、『法華経』や『起信論』を重視する日本的な特徴があることを明確にしている。Ⅳ「日本華嚴思想の諸問題——東アジア華嚴学の視座から——」は、前章の資料の詳細な検討をもとに、さらに一部の鎌倉時代の文献をも加えた上で、日本の華嚴思想で取り上げられるいくつかの主題を中国や朝鮮の場合と比較して、その特徴を明らかにしている。そこでは、無碍説・二乗廻心説（小乗の声聞や縁覚がどの段階で大乘に廻心するかという問題）・三乗廻心説（三乗の立場の菩薩がどの段階で一乗に廻心するかという問題）・法華経観という問題を取り上げ、日本独自の展開があったことを指摘している。Ⅴ「結論」で全体をまとめた上で、附録として二つの主要な文献の翻刻を付している。

以上のように、本論文は従来まったく研究のない領域に踏み込み、多数の未紹介資料を詳しく紹介して、平安時代の華嚴思想の流れを明らかにするとともに、その思想内容を中国・朝鮮の場合とも比較することによって、東アジアの大きな視座の中で、日本の華嚴思想の特徴を明確にすることに成功した。やや論述がこみいって分かりにくいところがあり、なお整理が必要ではあるが、画期的な成果と認められ、博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいと判断する。